

漢詩と仏教と煎茶：江戸禅僧の詠茶詩にみる文人交遊

梁 旭璋

1. 関心領域と問題意識

大典禅師（1719—1801）、字は梅莊、諱は顕常、淡海、蕉中等と号し、筆名は不生道人、淡海天常、東湖上人等。彼は江戸時代中期の有名な禅僧であり、また茶人、漢学者、漢詩人として名高い。享保 4 年（1719）に近江国の神崎郡伊庭郷（滋賀県）に生まれ、8 歳で父親に随って上洛し、後に宇治の黄檗山華蔵院に入り、11 歳で京都五山の相国寺慈雲庵で得度し、独峰慈秀を師と奉じた。また、少年大典は黄檗禅僧の大潮元皓と儒者の宇野明霞に師事して漢学を学んだ。享和元年（1801）で辞世し、享年 83 歳である。その中でも、とりわけ彼の漢詩集は彼の集大成である。代表作に『昨非集』、『詩語解』、『文語解』、『小雲棲稿』、『北禅詩草』、『北禅遺草』などがある。それらの中に、数多くの詠茶詩が残されている。

従来、大典禅師の茶書『茶経詳注』についての検討が多いが、それに対して大典禅師の漢詩集に関する専門研究が不足しており、彼の詠茶詩への関心はさらに少ない。いままで検討されていない茶詩がまだ多く残っているのは現状である。実際、彼の漢詩集にみえる茶人交遊の様子についてはまだ不明なところが多く残っている。したがって、本発表は大典の漢詩集を煎茶書の補足資料として考察を行いたい。そして、大典の漢詩集の中に書かれた喫茶関係の語句を調査した上で、解読を行いたい。その結果に基づいて大典の喫茶交遊の様子を復元し、江戸中期の茶人が如何に煎茶を京都・大坂地方で拡散して流行したのかについて解明したい。大典の漢詩集と詠茶詩を研究することによって、江戸時代の茶人の間に行われた喫茶交遊の実態を解明することで、煎茶書研究において欠如した情報を補足することが可能になる。

2. 既発表の論文との関連性

本発表は博士論文『日本近世煎茶書の研究：漢籍受容と文人趣味の展開を中心に』の第九章に基づいて添削・加筆するものです。内容そのものは未公開・未発表です。また、本来の研究の上で最新の進展と成果を追加する。

漢詩と仏教と煎茶：江戸禅僧の詠茶詩にみる文人交遊

重慶交通大学 梁 旭璋

はじめに

大典禅師（1719～1801）は江戸時代中期の詩僧。諱は顕常。字は梅莊。蕉中、東湖などと号する。別号に竺常、北禅老人など。享保4年生まれ、近江出身。臨済宗の禅僧。のち京都相国寺の住持。かつて宇野明霞に儒学を学び、詩文に優れた。また、幕命により対馬に赴任し、朝鮮修文職として国交文書を司った。享和元年死去。83歳。著作に「昨非集」「小雲棲稿」「北禅遺草」「皇朝事苑」「茶経詳説」「煎茶訣」などある。

一．大典禅師と江戸時代の漢詩ブーム

大典が活躍していた時代は江戸時代の享保（1716～1736）から寛政（1789～1801）までの時期である。この期間は日本国内では八代将軍徳川吉宗の享保の改革（1716～1745）、また老中松平定信の寛政の改革（1787～1793）が行われた江戸時代の重要な時期であり、社会・経済・文化が大きく変革を始めた時期でもある。この時代の一つの特徴として、町人は徐々に日本国内の商品流通の貿易の主導権を握り、町人経済の実力は次第に武士を超えて影響力は一層拡大した。その変化は、社会文化にも反映されている。例えば、この時期に印刷業が発達し、絵草子・読本・浮世絵などの日本独特の文化が発展し、庶民の教育施設である寺子屋が全国に設立され、また漢学や漢詩を熱心に研鑽する儒者が増え、本草学の研究も全盛期を迎えた。町人階級が武士階級にかわり、新しい時代を動かす主役として登場して江戸文化の主導者となっていったのである。

その中で、漢詩文と儒学が町人間で盛んに展開されたことも注目すべきである。江戸時代前期、幕府は政権を維持するため、自らの正当性を支持する思想として、儒学の中でも特に道德を重視する朱子学を官学として採用し、徳川家康は朱子学者林羅山を起用した。道德の実践を重んじる朱子学において、はじめ漢詩文は儒者にとって余技に過ぎなかったが、時代が進むと、だんだん儒学者の中から漢詩文をよくする者が現れ、すぐれた詩人も増えていった。例えば、石川丈山・新井白石・室鳩巢などがいた。元禄になると、京都では町人出身の伊藤仁斎が仁を重視すべきだと主張し、古義学を提唱した。また、江戸では荻生徂徠を祖とする古文辞派が台頭し、朱子学を批判し、儒学は古典の原典にさかのぼって、古典の真義を探るべきだと主張した。古学は、一世を風靡して町人階級にも刺激を与えた。古学派は、人情を重視し、道德の実践より文学の価値を認めたので、時代が進むと、ついに儒学や政治よりも漢詩文や文学を専門とする文人が輩出するようになった。中国の盛唐詩を模倣することを作詩の方法として漢詩を作り始め、またもともと漢文素養の高かった禅僧・儒者に作詩を教えてもらうことが多かった。18世紀になると、漢詩文の趣味

がさらに拡大した。この傾向は都市だけではなく、地方にも大きく広がった。漢詩人口が急激に増加し、多くの漢詩結社が現れ、多数の漢詩集・漢文集が出版された。

二. 大典禅師の漢詩集にみる詠茶詩

そのような背景で、大典は旺盛に詩作と著述に励み、大量の漢文関係書を残し、庶民読者の中にもとりわけ高い人気を博したという。また、彼は江戸時代中期の京都禅林の中でも一流の詩僧とされ、彼の漢詩も多くの人に愛読されていた。そして、大典の漢詩集を調べた結果、煎茶に関わる記録も多く見られた。これらの漢詩を通して、煎茶の流行の初期の状況を知ることが可能となる。また、大典の交遊圏を通して、煎茶の京都・大坂地域における拡大も考察できる。そのため、大典の漢詩集は重視すべき資料である。今回の発表では大典の五種類の漢詩集を取り上げ、各詩集における喫茶詩を整理してきた。

一点目は『昨非集』である。本書は大典の最初の個人の漢詩集であり、宝暦9年(1759)に刊行され、乾坤二巻あり、41才までの漢詩を収録している。序は同門かつ親友の菅原家長(高辻家長)が作成し、跋は門人五瀬浄王(聞中浄復)が作成、木村兼葭堂の支援を得て刊行した。本漢詩集から「庚午二月十四日洛下諸彦見会同賦得香字」など茶事に関わる漢詩14首が見つかった。特に、この時期には「大雪夜高居士携安田氏見過情話謝之」、「売茶翁携茶具訪士新先生煎茶飲之余亦與焉席上奉贈先生二首」の二作があり、売茶翁と宇野明霞の二人との交遊が見られる重要な資料である。

二点目は『小雲棲稿』である。本書は大典の漢詩集かつ漢文集であり、安永4年(1775)に刊行され、『茶経詳説』の翌年に出た作品である。当時、大典は57才であった。本書は全六冊十二巻で構成され、前六巻は漢詩、後六巻は漢文であり、宝暦9年(1759)から安永2年(1773)までの作品を収録している。序は同門の師弟片山北海が、跋は親友の藤元穠(字は秋卿)が作成した。刊記に「京都菱屋孫兵衛・林伊兵衛/大坂播磨屋新兵衛河内屋太助/江戸須原屋伊八」とあり、本詩集は京都・大坂・江戸の版元によって発売され、この三地を中心に流布されたと思われる。この詩集の中から「清静行贈孝秩」、「與聞中遊双林靈山清水諸地煮茗」など56首の茶詩が見つかった。そのなかでも、片山北海をはじめとする漢詩の結社の混沌社の文人たちとの交流記録には注目すべきである。

三点目は『小雲棲詠物詩』である。本書は大典の三冊目の漢詩集であり、寛政2年(1790)に門下の弟子によって刊行された。当時の大典は72才であった。同年には『北禅文革』四冊が刊行されている。本詩集は詠物詩を中心に収録した作品で、大典の親友六如慈周の序を付し、上下二巻ある。上巻は天部、地部、虫禽部、下巻は草木部、雜詠部、図画部となる。本詩集の中からは「進樹飡因用煮茶」、「與聞種二子携茶具遊東岩蔵」など6首の茶詩が確認できる。『小雲棲稿』と重なる詩もあるが、そこには未収録の新作が多い。

四点目は『北禅詩草』である。本書は大典在世時最後の漢詩集であり、寛政5年(1793)、

75才の時の作品である。上下二冊、全六巻、安政3年(1774)から寛政3年(1791)までの詩を収録している。六如慈周の序があり、弟子武藏天爵(伊藤天爵)が江戸で版木を彫刻した。刊記に「京都近江屋庄右衛門、田原勘兵衛、江戸須原屋伊八梓行」とある。本詩集の中からは、「茶詩五天見過」、「與諸子携茶具山門納涼」など75首の茶詩が見つかり、すべての詩集の中で最多の数である。これは大典が晩年に入ってから茶事に熱心に参与したことを示している。『小雲棲稿』では大坂の文人墨客との喫茶交遊が目立ったが、『北禅詩草』の茶詩では、京都が活動の中心となり、また交遊対象は僧侶を中心とした友人や門下弟子にかわっている。本詩集は大典の晩年の喫茶生活を考察するうえで不可欠である。

五点目は『北禅遺草』である。本書は大典没後7年、文化4年(1807)の作品であり、弟子によって整理された遺作である。寛政三年から寛政11年までの作品を収録している。全四冊、八巻あり、第一巻から第三巻までは漢詩集で、第四巻から第八巻は序、記、説、跋などの漢文集である。序文は弟子武藏天爵が作成した。表紙に「皇都星文堂 江都青藜閣」、刊記に「書林江戸須原屋伊八、京都石田治兵衛」とあり、江戸と京都の両地を中心に販売された作品である。本詩集の中から「春生以茶宴見招與維明新州同会実冬至前三日也席上賦贈」、「辛亥至日諸子為余設宴賦示」など23首の茶詩が見つかった。大典禅師の最晩年の喫茶生活を知るうえで貴重な資料である。

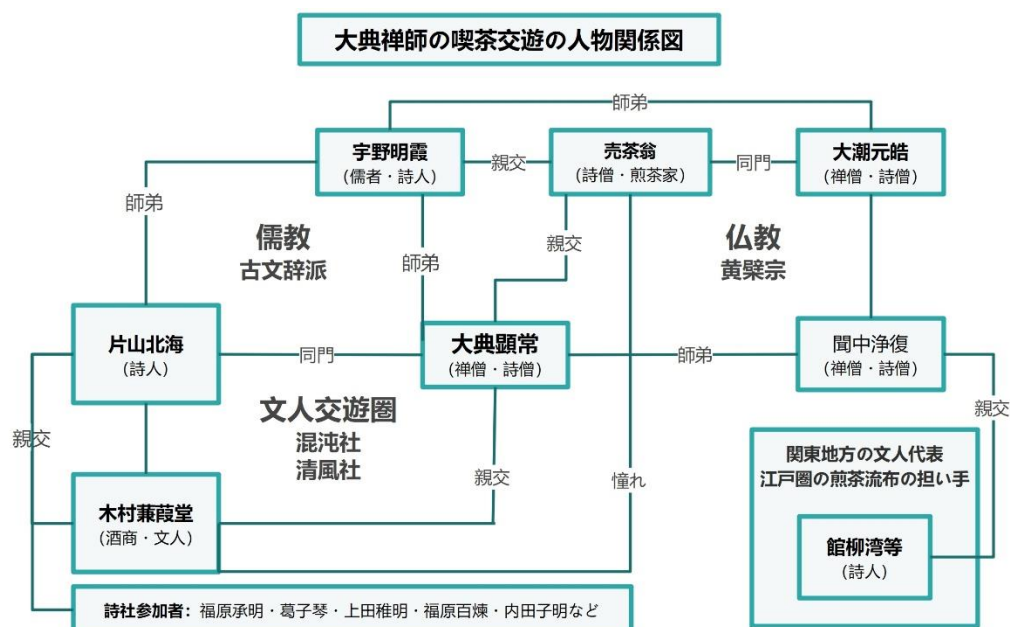
以上五点を整理することによって、大典の漢詩集においては、喫茶に関わる漢詩が百首を超え、大量に残されていたことを明らかにした。彼はごく普通の日常生活から売茶翁に学んできた新式の喫茶法の応用と普及に熱心に参与していたことが確認できた。

三. 大典禅師と京坂文人との喫茶交遊

大典の詠茶詩から確認できる人名は60人を超えている。それでは、大典とともに喫茶体験を共有した人が多いと推測できる。その中で、本名や通称を確認できるのは36人、そして身分を確認および推測できるものは49人である。大典の喫茶交遊の相手は禅僧が一番多く、29人が確認できた。その次は儒者であり、13人が確認でき、ほとんど片山北海の率いた混沌社関係の文人である。それ以外には医者も多いが、これは本草学が発達した江戸時代において、相当の漢学素養を持つ医者が多くいたためであろう。さらに、高辻家長、公遵法親王のような貴族や王族と同席したことも見られる。

出身地については、京都・大坂地域出身の人がほとんどであり、とくに京都と大坂出身の人が多い。京都出身は11人、大坂出身は9人であり、大典の喫茶交遊の活動範囲が京都・大坂地域に集中していたことは明らかである。茶詩によって特に大典と混沌社の社友との交遊が目立つ。その中に注目すべきなのは、片山北海、木村兼葭堂を代表とする文人は、大坂文化に強い影響力を持った人物であるため、彼らの参与により煎茶文化が幅広く普及した、ということである。大典と北海はともに宇野明霞の弟子であり、二人は先生か

ら強い影響を受けて売茶翁の煎茶を日常生活に積極的に取り入れていたことがわかった。実際、煎茶席を開くことは北海をはじめとする混沌社の社員たちに漢詩創作の場所と集まる理由を提供し、互いに漢詩の実力を高め、文人交流を深める機会を与えたのである。



また、大典は売茶翁高遊外の独創の煎茶の支持者かつ宣伝者として、『茶経詳説』や『煎茶訣』など漢籍風の茶書を出版することに力を注いだ。また、大典は積極的に周辺の友人・弟子と煎茶席を開いたことがわかる。そこで、彼のように煎茶を嗜む人が当時の京都・大坂に多く存在したことも推測できる。すなわち、京都・大坂は最初に煎茶の文人趣味を受け入れ、最初に文学世界に煎茶関連の書物を生み出した地域といえよう。さらに、煎茶書はまさにそのブームの産物である。例えば、煎茶書『青湾茶話』の作者大枝流芳は京都出身で、のちに大坂で隠居生活をおくった文人である。また、上田秋成も京都で隠棲している間に煎茶書『清風瑣言』を書いた。このような、文人間の高雅な喫茶交遊活動が京都・大坂地域の人々の煎茶への関心を高めたのである。

おわりに

本発表は、煎茶研究における煎茶書の補足として、江戸時代の漢詩集の資料価値を示した。大典禅師の漢詩集『昨非集』、『小雲棲稿』、『小雲棲詠物詩』、『北禅詩草』、『北禅遺草』などの作品中の詠茶詩の考察によって、江戸時代の文人間の喫茶交遊について新しい視点と情報を提示することが出来た。ここから、江戸禅僧の漢詩集は煎茶書の研究にとって重要な資料であったといえる。